

屋島周辺史跡・伝説地



香川県立屋島少年自然の家

屋島は、標高 292.1m、東西約 2 km、南北約5kmの台地で、山上は南嶺と北嶺にわかれた浸蝕台地で、学術上「メサ」と呼ばれている。北嶺には、大正 12 年に香淳皇后により名付けられた「遊鶴亭」が、南嶺には、瀬戸内海の展望地「獅子の嶺巖」「談古嶺」をはじめ四国八十八ヶ所八十四番札所屋島寺がある。また、古代山城である屋島城跡や源平合戦の古戦場跡などがよく知られている。これらの地質的特性と歴史的特質によって昭和九年に史跡天然記念物に指定された。

1 安徳天皇社（あんとくてんのうしゃ）

寿永2年(1183 年)西国に逃れていた平宗盛は安徳天皇を奉じ、長門から屋島に移った。宗盛は郡司に命じて内裏を造営し、公家の屋敷、武士の陣営をこの場所に作らせた。境内は安徳天皇の内裏跡と伝えられている。

2 佐藤継信の墓（さとうつぐのぶのはか）

1185 年2月、源平合戦で源氏の大將源義経の矢面に立ち身代わりとなって討ち死にした佐藤継信の墓を高松藩初代藩主松平頼重公が広く世人に知らせるために遍路道の傍らに建立した物である。

3 菊王丸の墓（きくおうまるのはか）

佐藤継信が、能登守教経に、射落とされたとき、教経に仕えていた菊王丸が、継信に駆け寄り首を取ろうとした。継信の弟忠信はそうはさせじと、弓をよく引きねらいを定めて菊王丸を射た。矢にあたり菊王丸はまもなく息たえた。平氏方はここまでなきがらを運び葬った。

4 総門跡（そうもんあと）

源平合戦時平氏は内裏ができるまで牟礼の六万寺を天皇の行在所とした。この時ここに門を構えて海浜の防御に備えるとともに、海より上陸するときの拠点とした場所である。

5 射落畠（いおちばた）

佐藤継信が能登守教経に射落とされた所である。昭和6年に 30 世孫の佐藤信古氏がこの地に碑を建てた。

6 義経弓流しの跡（よしつねゆみながしのあと）

源平合戦時、源義経は勝ちに乗じて海中まで駒を進めて戦っていたが、脇下にはさめていた弓を海中に落としてしまい平家方に熊手をかけられ海中に落ちかかりながらも弓をかき寄せ引き上げた。危険な目に遭ってまでなぜ、と源氏の軍兵に言われると、平家方に弓を拾われて「源氏の大將ともあろう者がこんなに弱い弓を使っているのか」と物笑いになるのをおそれたとされている。

7 洲崎寺（すざきじ）

眺海山円通院と号し、高野山真言宗の寺である。源平合戦の兵火にあい、義経は寺院の焼失を悔い、再びこの地に寺を建立するも後、中世におとろえた。元禄 12 年に再興した。佐藤継信の死の時、この寺の扉に乗せて運んだとの伝えがあり、継信ゆかりの武具などが残されている。

8 祈り岩（いのりいわ）

源平合戦で2日目の戦いが終わろうとしたとき、平家側の船から女官が現れ扇の的を源氏側に射させようとした。義経に選ばれた那須与一が扇の的を射るとき「南無八幡大菩薩・・・」と祈願した場所であるといわれる。

9 駒立て岩（こまだていわ）

那須与一は扇の的を射るとき、海中まで駒を進め駒をこの石の上に立てて扇を射たといわれている場所である。

10 船隠（ふなかくし）

屋島東海岸檀ノ浦の対岸北の浜で、海上からの源氏の攻撃に備えてこの浜に平家の水軍、軍船を隠していたと伝えられている。

11 赤牛崎（あかばさき）

源平合戦時屋島は島であり容易に渡ることができなかったが、赤牛が浅瀬を渡って屋島に行けるという話を聞き義経はこの場所から馬で渡らせ平家の屋島側の拠点を焼払わせた。

12 鞍掛松（くらかけまつ）

源義経らは阿波勝浦より屋島に強行し、古高松の民家を焼払い白旗をたくさん立て大軍が来たように見せかけた。この時義経が鞍を松に掛けて休憩した場所と言われている。

13 神櫛王墓（かんぐしおうはか）

神櫛王は第12代景行天皇の皇子で、讃岐の国造の始祖である。王が亡くなってからこの地に葬られた。以来この辺りを王墓と呼ぶ。明治2年に松平頼聰が現在の陵墓に改修した。

14 佐藤継信の墓・太夫黒の墓（さとうつぐのぶのはか・たゆうぐろのはか）

源平合戦時義経の身代わりとなって戦死した佐藤継信の墓は二ヶ所あるが、ここは源氏側が当時手厚く葬った場所である。また、継信の死を嘆いて、義経は覚阿上人という志度寺の僧に大切にしていた馬を与え菩提を弔ってもらった。その馬の墓を継信の墓の横に作った。

15 長刀泉（なぎなたいずみ）

源平合戦時、源氏方は瓜生ヶ丘に陣を敷いたが、この辺りは海が近くなかなか水を確保することができなかった。そこで弁慶が長刀で井戸を掘るとききれいな水が湧きそれを使って炊事したと言われている井戸である。

16 菜切り地蔵（なきりじそう）

源平合戦時、弁慶が兵のために炊事をするのにまな板が無かったのでこの地蔵の背で野菜を料理して汁を作ったと言われている。地蔵の背にはその時の刀痕があるといわれている。

17 瓜生ヶ丘（うりゅうがおか）

源平屋島合戦の時、1日目の戦いを終えた源氏軍が陣を敷いたところである。王墓の東南、西林寺あたりから菜切り地蔵堂にかけての丘で土地の人は源氏が丘とか機敷が岡とも呼んでいる。

18 六万寺（ろくまんじ）

天平年間に全国で疫病が流行し、多数の死者を出したので、聖武天皇は行基にこの地に寺を建立し祈らせたと、疫病は治ったといわれる。その後有志により六万軀の小仏像を安置して六万寺と称したと伝えられている。源平合戦の時は安徳天皇の行在所となった所である。

19 源氏ヶ峰（げんじがみね）

五剣山の南方に位置し、源平合戦時義経がこの山に登り、平家陣を見て戦略を立てたと言われている。峰へ登る山道は現在はない。

20 栗山堂（りつざんどう）

江戸寛政年間の儒学者柴野栗山の生地。後藤芝山に学び、後江戸昌平坂学問所に学ぶ。老中松平定信に抜てきされ幕府に仕え侍問儒員となり、寛政異学の禁を断行した。明治になり栗山顕彰会を設立し明治39年に栗山堂を建立した。

21 八栗寺（やくりじ）

四国八十八カ所八十五番札所である。真言宗高野派に属し、本尊は聖観世音、弘法大師の開基で、もと八国寺といい後、八栗寺と改称した。戦国時代長曾我部元親の兵火で消失した。江戸時代になってから寛永19年高松藩主松平頼重公が本堂を再建し、宝永6年3代藩主松平頼豊公が改築した。

22 大仙山の岩座（だいせんざんのいわくら）

古代の遺跡で3~4千年昔のものであると考えられる。岩座とは神を祭った場所で、中心に立石を置き、周囲に石を築いた。ほぼ完全な形で残っているのは珍しいという。

23 竹居観音岬（たけいかんのんみさき）

四国の最北端の岬である。洞窟があり、松平家高松城鬼門の守護として、洞内には馬頭観世音を安置してあり、八栗歎喜聖天さまの奥の院ともいわれている。

24 万葉歌碑（まんようかひ）

庵治の鎌野港は、その昔藤原鎌足によって開かれた港といわれ、古歌にも読まれている。碑には「味釜之塩津乎射而水手船之名者謂手師乎不相八方」と書かれている。

また、この地には鎌足を祀った補公の宮跡もある。

25 長崎の鼻・砲台跡・長崎古墳（ながさきのはな・ほうだいあと・ながさきこふん）

屋島西北端にあり、江戸時代より役人を置いて海上の非常に備えた。俗に遠見番といわれ、燈火をつけて、夜中の航海者のために標識の役目も果たしたと言われる。幕末には、外国船が日本に現れるようになり、幕府は 1863 年高松藩主に、この地に砲台を築かせた。砲台は上、中、下の3段よりなり、中、下段には大砲が備え付けられていた。長崎の鼻の木里神社に向かう道の南側約 30mの所から細道を上ると丘陵上に古墳時代前期のものと思われる前方後円墳長崎古墳がある。全長 45mで明治時代に発掘され人骨や刀剣等が出土した。

26 屋嶋城跡（やしまのきあと）

天智天皇が唐と新羅の侵攻に備え、築かせた山城で、667年に築かれたことが「日本書紀」に記されている。断崖絶壁を最大限利用した古代山城で、城壁の9割程は天然の崖を利用している。

27 加持水（かじすい）

弘法大師が屋島寺で修行したときこの水で誦呪(しょうじゅ)加持して仏天に供養した。それ以来今日まで水が枯れたことがないと伝えられている。傍らの石に梵字が刻まれており、弘法大師の筆跡と言いつたされている。

28 不喰梨（くわすなし）

弘法大師がこの木の下で休息したとき、梨の実がおいしそうになっていたもので、それを持ち主に所望したところ、持ち主は大師を欺いて「おいしそうに見えるが、実は苦く渋いので食べられない」と言った。その後この梨は本当に渋くなり食べられなくなったと伝えられている。

29 屋島寺（やしまじ）

四国八十八カ所八十四番札所である。754年唐僧鑑真が屋島北嶺に寺を建てたのが始まりで、その弟子空鉢恵海律師がその後普賢堂を営み、その後空海 810 年に南嶺の現在の地に寺を移し、十一面観音座像を本尊とする本堂を建立したと伝えられている。その後たびたび改築されて現在に至る。近くには血の池と呼ばれる池があり、源平合戦で武者たちが血刀を洗ったため水が血の色に変わったとも言われている。その池は弘法大師が宝珠をおさめ周囲を池としたものだが竜神が宝珠を奪いに来ると伝えられ、瑠璃宝の池とも呼ばれている。

30 千間広場（せんげんひろば）

鑑真和上が奈良に向かう途中屋島に登り堂を立てたと言いつたのある千間堂跡がある。南嶺の有料道路駐車場より遊歩道が整備されている。現在は湿地となり多くの野鳥が集う。千間広場より遊歩道を北に向かうと遊鶴亭の展望台があり 320 度の瀬戸内海の展望が楽しめる。

トイレのある場所

1 安徳天皇社 21 八栗寺 29 屋島寺 30 千間広場

城岬公園 与一公園 石匠の里公園

屋島での源平合戦 年表

- 1183年 9月 木曾義仲の軍に敗れ京を去り九州にのがれていた安徳天皇が屋島に入る。四国の主な武士を平家の味方に付け平家の本拠地となる。牟礼の六万寺⑧を安徳天皇の行宮と定め、総門④を洲崎寺⑦の近くに置き、海からの上陸の拠点とした。
- 1184年 2月7日 平家は再び京を目指して勢力を拡大し神戸まで兵を送っていたが源義経のひよどり越えの奇襲により一ノ谷の戦いに敗れ再び西へとのがれ屋島に本隊を置いた。
- 1184年8月～12月 源頼朝は義経が後白河法皇から檢非違使、佐衛門少尉に任官したことを良く思わず義経には平家追討の命を出さず、源範頼に九州・四国の平家を追討させるが失敗する。
- 1185年 1月 義経ついに頼朝より平氏を討ての命をもらう。
- 2月11日 大阪の渡辺学に船と兵を用意させ弁慶は和歌山の熊野水軍を味方につけた。
- 2月18日 義経5艘の船で大阪を発ち小松島の勝浦港に着き、桜ノ間城を攻め落とし屋島に向かって150騎で丸1日かけつづけた。
- 2月19日早朝 屋島の対岸に着いた義経は古高松の民家を焼き払い白旗をたくさん立て、大軍がきたように見せかけた。この時義経が鞍を松にかけ休憩したといわれるのが鞍掛松⑫である。
- 平家方は源氏は海から攻めてくるものと信じており、船隠⑩に船を隠し、戦いに備えていたが早朝の陸からの奇襲に合いあわてて船へと逃れた。この時洲崎寺⑦、総門④、六万寺⑧等平家の拠点は焼き払われた。義経は赤牛が浅瀬を渡って屋島に行くという話を聞き赤牛崎⑪より屋島に渡り安徳天皇の仮宮安徳天皇社①等屋島側の拠点も焼き払った。
- 日中 あわてて船へ逃れた平家だが源氏の兵が少数だとわかり船で総門を目指し平家は海から源氏は陸から矢を打ち合った。この時平家一番の弓の名手平教経は義経をねらって矢を放ったが先頭にいた佐藤継信が身代わりとなり前に立ち射落とされた射落島⑤。その継信の首を打とうとかけよった教経の家来菊王丸を継信の弟忠信が射落とした。菊王丸は船まで運ばれて帰ったが息を引き取り仮宮近くに埋められた菊王丸の墓③。継信の墓は、その死を悲しみ、義経が菩提を弔うために志度寺に愛馬太夫黒を贈りその墓を継信の墓の横に葬った⑭のと、高松藩祖松平頼重が遍路道近くに石碑を建てた②ものと2箇所ある。

- 2月19日夕方 1日目の戦いを終えた源氏軍は瓜生ヶ丘⑭に陣を敷いた。その時弁慶が長刀で井戸を掘ったと言う長刀泉⑮の伝説や、同じく弁慶がまな板の代わりに地蔵の背を使い料理したと言われる菜切り地蔵⑯の話が残っている。
- 夜 二晩寝ずの強行軍の疲れがでて源氏軍は寝入った。義経は平家の夜襲を警戒し付近の農民に篝火を焚かせ八栗方面から瓜生ヶ丘まで一晩中歩かせた。平家は意見が分かれついに夜襲をかけられず源氏を破るチャンスを逃してしまった。
- 2月20日 総門前の浜を中心に押しつ押しされつの戦いが続いた。平家側は伊予より1000騎の援軍を待ち、それを悟られないように攻めては引き、引いては攻める戦法を取った。その時義経が脇にはさんでいた弓を海に落とし平家に弱い弓を使っているのを知られるのがいやで命がけで弓を拾った話弓流し跡⑰や源氏的美尾屋十郎が平家の悪七兵衛景清に兜の鍔を引きちぎられる景清の鍔引きの話が残っている。
- 夕方 2日目の戦いも終わろうとしたとき平家側の船から女官が現れ扇を源氏方に射させようとした。義経は那洲与一を選び与一が当たるようにと祈った祈り岩⑱や弓を射るとき馬の足を乗せた駒立岩⑲がのこっている。
- 2月21日 平家は船で八栗半島の北を回り志度に上陸して背後から攻めようとしたが、義経に知られ志度寺のあたりで平家は破れた。待てども援軍は来ず、志度の作戦は失敗し、源氏の大船団が屋島へ向かっているとの情報が入り西に向かって安徳天皇とともに落ちのびていった。
- 2月22日 源氏方梶原景時らの140余艘の船が屋島に到着した。
- 3月24日 山口県壇ノ浦にて最後の合戦、安徳天皇は入水、平家は滅ぶ。

少年自然の家から主な場所までの最短距離・標準時間 徒歩(自転車)

- | | | | |
|---------|-----------------|-------|-----------------|
| ① 安徳天皇社 | 1.3 km 15分 (5) | ⑦ 洲崎寺 | 2.5 km 40分 (10) |
| ⑧ 与一祈り岩 | 3.1 km 50分 (15) | ⑩ 船隠 | 6.0 km 90分 (30) |
| ⑪ 赤牛崎 | 3.6 km 55分 (15) | ⑫ 鞍掛松 | 4.1 km 70分 (20) |
| ⑬ 菜切り地蔵 | 3.7 km 60分 (15) | ⑱ 六万寺 | 5.5 km 90分 (25) |

トイレのあるところ ①安徳天皇社 与一公園 石匠の里公園 城岬公園